

◎論文◎

『北海タイムス』とアイヌ問題 — 北海道博覧会の記事についての考察 —

宇田 啓子

はじめに —『北海タイムス』の歴史的背景—

- 1 「開道五十年」と北海道博覧会
- 2 アイヌ展示と人類館事件
- 3 明治記念拓殖博覧会におけるアイヌ展示
- 4 博覧会に見える帝国主義
- 5 アイヌと「和人」の「雑婚」

おわりに

はじめに

—『北海タイムス』の歴史的背景—

本論では、「北海道（中略）は日本の『植民地』であった」⁽¹⁾という点を考察の基本姿勢として、日本の移民・植民政策において差別される側とする側という両義性を持つ北海道の地域的特殊性の有無を、現在の『北海道新聞』の前身である『北海タイムス』に掲載された大正7年（1918）の北海道博覧会に関する記事から検討する。

新聞を考察対象の中心とするのは、現在ほど一般家庭に普及していなかったとはいえ、雑誌よりは読者層が限定されておらず、上層から下層まで広範囲にわたって影響力を及ぼしたと考えられること、つまり実生活に密着した媒体であるため、現実的であるという特徴を重視したためである。そして、北海道の新聞の中でも最

も購読者の多かった『北海タイムス』をその代表格として扱うことにより、北海道全体の傾向をつかむことができると思われる。

昭和27年当時、北海道新聞社長であった阿部謙夫は、「開拓着手後十年を経ない明治十一年には早くも新聞の誕生を見」⁽²⁾たことを指摘し、北海道においては開拓の歴史と新聞の歴史は軌を一にするものだと述べている。つまり、「内地」とは異なった歴史を有する北海道、そこにおける移民・植民問題を考察するためには、広範な読者層を形成し、その歴史が明治以降の北海道の歴史と合致する『北海タイムス』を考察対象とすることが、本研究を最も効果的に行なう方法であると考えられるのである。

北海道における最初の新聞は、明治11年1月7日創刊の『函館新聞』である。以後、明治13年6月16日創刊の『札幌新聞』（経営難により25号で廃刊）、明治20年1月20日創刊の『北海新聞』と続く。『北海新聞』は、明治20年10月1日、題号を『北海道毎日新聞』と改称し、道内では『函館新聞』に次ぐ日刊紙となった。

明治25年には、前年、小樽で創刊された『北門新報』が札幌に本社を移し、明治32年には、『北海時事』が日刊紙として札幌に創刊された。『北門新報』は、短期間ながら主筆に中江兆民を迎え、『北海時事』は、政治結社「北海道俱楽部」の機関紙として、政論新聞の色調が濃いもので

⁽¹⁾ 小熊英二『〈日本人〉の境界』新曜社、1998年

⁽²⁾ 渡辺一雄『北海道新聞十年史』北海道新聞社、1952年

あった。

『北海タイムス』は、既に創刊されていた『北海道毎日新聞』・『北海時事』・『北門新報』それぞれの代表者が、立憲政友会札幌支部の役員を務めていた関係から、立憲政友会機関紙として合同し、創刊された。この背景には、北海道における地盤強化のために、政友会が第1回北海道会議員選挙を利用し、『北海タイムス』創刊に力を入れたという経緯がある。

西田長寿は、この時代の新聞社主の多くは政界と密接なつながりを持っており、「不偏不党」を標榜していても、選挙時には自らの支持政党を応援する道具として新聞を利用したと述べている⁽³⁾。

もう一つの理由として挙げられるのは、合同前の三社の発行部数がそれぞれ5、6千部を出ず勢力が拮抗していたことから、合同によって規模を拡大し、全道に普及させ、財政力の強化を図ろうとしたということである。これによって、発行部数は1万5千部を越え、「帝都以外に在りては日本全国中大阪朝日及大阪毎日を除けば本紙に及ぶものなかるべし」(明治34年9月3日の「発刊之辞」という状況になった。

つまり、5、6千部の小規模な新聞のままでなし得なかった経営の安定が、立憲政友会の機関紙となることで達成されたのである。この後、北海道の言論界をリードしていく『北海タイムス』にとって、一政党である政友会の影響下にあるということは、自由な言論活動を行なうに当ってマイナスにはたらくことになるのであるが、その反面、北海道民の自治意識の芽生え・政治意識の高まりが、創刊になんらかの形で影響していたことは、『北海タイムス』創刊が、北海道から植民地意識を払拭するための下地にもなったといえるのである。

この合同をきっかけに、『北海タイムス』は北海道を代表するブロック紙として成長していく。これには、北海道庁から「公布式新聞」に指定されていたことが大きく関係しているだろ

う。「公布式新聞」とは、「北海道庁公文」として訓令や告示、『官報』到達日を一面トップに掲載する新聞のことである。当時、官庁の公文書には発表制限があり、限られた新聞だけが掲載を許可された。つまり、選ばれた新聞として権威を高めることに繋がったのである。ところで、「公布式新聞」と政党機関紙としての『北海タイムス』は「両立」されていることから、この二つの面は必ずしも対立するものではなかったことが推測される。「公布式新聞」は、いわば掲示板としての役割に過ぎなかったので、たとえ公布の内容が支持政党の政策と相容れないものであっても、矛盾を起こすような窮屈さはなかったのだろう。

『北海タイムス』創刊から3年後、日露戦争が勃発した。この時期の『北海タイムス』の発行部数は、第2次世界大戦前に社史を編纂していないこともあって正確な数字はわからないが、『北海道新聞』になってからの社史などの数字を参考にすると以下の通りである。

- ・明治34年—1万5千部（創刊時）
- ・明治43年—2万部
- ・大正中期—5万部程度（広告取扱高、全国地方紙首位）
- ・大正末期—7万部突破
- ・昭和17年—20万部（統合当時）

北海道新聞社の社史には「日露戦争を契機として、にわかに激増した発行部数に対応」⁽⁴⁾と表現されているので、明治37年の日露戦争当時には、地元の陸軍第七師団の戦況報道を得るために、広範囲の読者が買い求めたと考えられる。しかし日露戦争を挟む明治34年から43年の9年間で5千部程度しか増えておらず、戦後の伸びがそれほど顕著なものでない。それよりも目を引くのは、明治43年の2万部から大正中期の5万部へと10年足らずで3万部も増加している点である。

実は、大正5年、『北海タイムス』は新社屋の完成を機に「新築の辞」を発表し、その中に「非

⁽³⁾ 西田長寿『明治時代の新聞と雑誌』至文堂、1961年

⁽⁴⁾ 注2に同じ

「機関紙宣言」をしている。前述したように、立憲政友会の機関紙となったことで発行部数は1万部を超えて、経営の安定を手に入れた。しかし、中央紙は明治30年代により広く購読者を集めるために政党色の薄い独立新聞（報道新聞）を目指し始めていた。その方が、個人の支持政党がどこであっても購読される可能性が広がる。同時に新聞社自体も、政界地図の激変に振り回されることが少なくなるからである。

『北海タイムス』が、新社屋の「新築の辞」を発表する2年前の大正3年には、立憲政友会と対立する立憲同志会が政権を握り、長い間、与党として君臨していた政友会が野党になったことも、『北海タイムス』の政党機関紙離れを加速した。政友会の機関紙時代には取り込めなかつた読者層をも引き入れた結果、部数と共に広告取扱いも急増し、地方紙の中で有力紙の一つに数えられるようになる。非機関紙を宣言したということは、自由な報道が可能になった反面、独立経営を余儀なくされるということである。

『北海タイムス』も独立新聞化を達成するために、着々と準備を進めてきていた。日露戦争という非常時における発行部数の激増後、この機に乘じ、輪転印刷機の導入、国内外通信社との提携、電報の活用、支局・販売網の拡大を行ない、設備投資を強化していたのである。その成果は顕著に表れ、「発行部数は年とともに上昇し、大正中期には、道内各日刊新聞の発行部数総計約十万部のうち、北海タイムス一紙だけで、その半ばを占め、広告扱い高も全国地方紙の首位を誇ったほど」⁽⁵⁾に規模を拡大した。

つまり、広範囲な読者層に行き渡る報道新聞には、広告掲載の依頼が増え、経営が安定する。潤沢な資金を背景に、懸賞など購読者が直接、参加できる企画事業も充実させられるようになり、ますます購買層が広がるという循環である。

このように、母体の一つである『北海時事』から引き継いだ「政論新聞」という特色を脱し、

「報道新聞」へ移行することは、生産過程の近代化・販売網の拡大と表裏一体であった。その後、『北海タイムス』は、昭和に入って、函館（『函館タイムス』）、旭川（『旭川タイムス』）、室蘭（『北海日日新聞』を買収して『室蘭タイムス』と改題）、帯広（『十勝毎日新聞』）と規模を拡大していくことになる。

第2次大戦後作られた社史には、「大正のはじめ『敵正中立』の旗じるしをかけてからは、国政問題に対しても、おおむね公平な主張をもって論じてきたと述べ、「昭和の初期においてさえ、なお、信念をもって圧制的権力に抵抗する新聞本来の使命をもちつづけた」と記されている。その論拠として、「連合軍総司令部」によって発表された『太平洋戦史』に、『北海タイムス』が「自由主義的動向をもつ地方紙」と称えられていることを挙げ⁽⁶⁾、「報道新聞」達成後の中立性が強固なものであったことを示している。

以上考察してきたように、『北海タイムス』は、立憲政友会の機関紙として出発し、以後15年ほどかけて非機関紙へと変貌を遂げることになる。一政党とのつながりは年とともに薄れる反面、道庁の「公式式新聞」としての性格は、「報道新聞」化を達成しても引き継がれた。つまり、立憲政友会とのつながりは切れても、北海道における特殊な地位は維持したいと考えられていたことが推測される。当初から官主導で行なわれてきた北海道の開拓だが、明治・大正を通じてもなお、道外からの開拓民を受け入れる状態にあり、北海道において、道庁の勢力が広範囲に及んでいたことがその理由であろう。

北海道は、徴兵令や市町村制度の施行など、沖縄と並んで他府県とは異なる扱いを受けていたため、『北海タイムス』は紙面構成に独自の見解を提示することを目指した。その取り組みを続ける中で、出身地が様々である開拓民に、道民としてのアイデンティティを喚起させることに一役買うことになる。つまり、『北海タイムス』

⁽⁵⁾ 渡辺一雄『北海道新聞二十年史』北海道新聞社、1964年

⁽⁶⁾ 注2と同じ

は道外との接点を確保しつつも、寄り合い所帯である北海道の人びとに連帯感を持たせるような紙面づくりを心がけていたのである。

1 「開道五十年」と北海道博覧会

日露戦争の号外競争が一段落すると、部数を低下させる国内の新聞社が続出し、その打開策の一つとして、博覧会関連の事業が行なわれ始めた。当初は大規模な新聞社でも独自で博覧会を企画・開催することは難しかったため、博覧会場に休憩所を設けたり、新聞の特別付録を発行したりすることに留まっていた。だが博覧会関連記事は閲覧される割合が高く、広告収入も大いに期待できたので、参入する新聞社が増えた。

このようにして、資本力のある新聞社が「巡航船博」・「汽車博」・「明治記念博」など各種の博覧会を開催するようになる。協賛するだけでもかなりの資金を要するこの事業を主催し成功させることは、一流新聞社として世間に認知されることでもあり、ひいては信頼を得て購読者を増加させることにも繋がった。山本武利は、明治から大正に移るこの時期に、各新聞社が挙って博覧会事業に携わるようになった背景について次のように述べている。

博覧会の入場者は数が多く、あらゆる階層に広がっているので、部数と読者層の拡大をはかる新聞社にとっては、絶好の宣伝の舞台であった。戦後における特定の均質的階層から不特定の異質的階層への新聞市場構造の変動は新聞社事業の性格をえており、多種多様の階層を対象とし、あらゆる階層に人気のある博覧会が新聞社事業において急速にその地位を高めてきた⁽⁷⁾。

もともと東京圏や大阪圏のように、購読者の

層に合わせて多様な性格の新聞が発行されていなかった北海道では、札幌に本社を置く『北海タイムス』が大きな勢力を持っていた。そのため、知識人から下層民まで広範囲の購読者を対象にした記事を掲載することに特色があった『北海タイムス』が、さらに「不特定の異質的階層」へ市場を広げるためには、階層はおろか居住地域も様々な人々が集まる博覧会で、何らかの形で存在感を示すことが必要となった。そして行なわれたのが児童博覧会(以下、児童博と略)なのである。

明治2年(1869)の開拓使設置以来の「開道五十年」を記念した北海道博覧会(以下、道博と略)は、大正7年8月1日から9月19日までの50日間にわたって、札幌区2会場・小樽区1会場で開かれた。この時期は第1次世界大戦中であり、米騒動・シベリア出兵と緊迫した事件が続いたが、3年の歳月をかけて準備された道博はおよそ140万人の観客を集め、集客数の点からは当初の目標を達成した。自社の記念事業として同時期に開催された児童博は、このような社会情勢の下に行なわれた。

児童博とは、この頃、全国で盛んに開催されていた博覧会の一種である。明治初期の殖産興業的な性格から次第に娯楽化傾向を強めていた博覧会であるが、それに伴い主要なターゲットも、大部分が男性である政府関係者・資本家・商工業者から子ども・女性へと変化していった。

日露戦争後、先進国との仲間入りを果たしたと自負していた日本にとって、商工業の発展に次いで力を入れたのは、一般家庭の「先進国化」である。ホワイトカラー層の台頭を受け、博覧会もそれまで一般的だった大家族から、現在でも政府による様々な試算のモデルケースとなっている夫婦と子ども2人という家族構成を対象とし、彼らが文化的・衛生的な生活を送るために知識や情報を授ける場へと変化していったのである。つまり政府が推し進める「先進国化」が、上流層から中流層へと対象が移っていったのだ。

北海タイムス社が「開道五十年」に当る大正

(7) 山本武利『近代日本の新聞読者層』法政大学出版局、1982年、315頁

7年に児童博を開催したのも、開拓が一段落し、子どもを単に労働力としてではなく、次の世を担う者として育もうという余裕が生まれたことも無関係ではないだろう。

さて、札幌区の大通西2丁目に設けられた児童博の展示施設の一つであるアイヌ館は、「日高国沙流郡平取村から呼び迎へた酋長平村イコシア^(不明)夫妻が日常生活その儘をやって観覧者を迎へる」（『北海タイムス』大正7年8月1日）ものであった。ちなみに、この人間そのものを展示する手法は、すでに1889年のパリ万博から始まっている。以後、『北海タイムス』は連日にわたって児童博を中心とした博覧会の記事を掲載している。だがその内のアイヌに関する記事は、「地域の特産品」または開拓の成果を際立たせるものとして扱われた。

例えば、「札幌遊園地新興行地」内に「矢野動物園」と「アイヌ団」が共に配置されるという無神経な展示方法が何の躊躇もなく記事にされている（『北海タイムス』大正7年8月12日）。そこには、動物園と同じ枠組みの中で語られ、本人たちの意思に関係なく、「北海道の象徴」として熊と共に見世物にされるアイヌの姿が見出されるのであるが、これに対する批判記事は見つけることができない。

吉見俊哉によれば、これより以前のパリ万博で人間を「展示」する植民地集落が設置されたのも、「その一〇年ほど前からブローニュの動植物園、ジャルダン・ダクリマタシオンで行なわれていた展示方法を大規模に拡大させたものであった」⁽⁸⁾という。すなわち、植民地住民の「展示」は、動物や植物の展示と同じ流れを汲むものとして捉えられていて、児童博の主催者にも同様の考え方があったことが推察される。

西欧人の真似をしてアイヌを「野蛮人」扱いする日本人の心性は、丸川哲史が引用しているエメ・セゼールの分析から説明できる。それは、「植民者が被植民者に投げかける『獣化（野蛮

人）』の心理機制」⁽⁹⁾であり、

植民地化するものは、自らに免罪符を与えるために、相手の内に獣を見る習慣を身につけ、相手を「獣として」扱う訓練を積み、客観的には自ら獣に変貌していく⁽¹⁰⁾

という過程である。「彼等は野蛮人であるから」「彼等は人間というより獣の中の最上位者と考えられるから」という理屈付けにより、自らの行動を正当化していく。この心理の少しソフトな表現に「彼等は子供であるから」というものがあるが、理屈としては同じである。その結果、「彼等」を教化することが義務であるという考え方方が生まれるのである。そして「彼等」には、教化されることは「正当な罰であり受けるに値する試練であると考えるよう」「説得しようとする」⁽¹¹⁾のである。

ポール・ギルロイは著書の中で、デュ・ボイスの「人間と畜生の間のどこかに、神様は『第三種』を創造し、それを『ニグロ』と名付けたのだ。それは、こっけいで単純な生物で、同時に一定の条件下では愛すべきものだったが、厳格に舞台の裏側を歩くことを運命づけられていたのだった」⁽¹²⁾という文章を紹介している。「一定の条件下では愛すべきものだったが」という言葉に、「従順」であることが保護の条件であるとされたアイヌの境遇が想起される。

いづれの植民地に於ける土人で君が稜威によりて斯の如き目出度き状況を示すのは何たる聖代の賜物ぞやと感ずる人も多かった。

（『北海タイムス』大正7年9月19日）

⁽⁸⁾ 丸川哲史『台湾・ポストコロニアルの身体』青土社、2000年

⁽¹⁰⁾ エメ・セゼール「植民地主義論」「帰郷ノート」平凡社、1997年

⁽¹¹⁾ J-P.サルトル、鈴木道彦他訳『植民地の問題』人文書院、2000年、184頁

⁽¹²⁾ ポール・ギルロイ、毛利嘉孝訳「主人、女主人、奴隸、そして近代のアンチノミー」『現代思想』青土社、1996年

⁽⁸⁾ 吉見俊哉『博覧会の政治学』中公新書、1992年、184頁

(愛奴館に入る儀道庁長官を見て——引用者)
酋長は、「十一州のお殿様がお見得になった」とメノコや居合せた旧土人に告げ喜悦の涙を泛べて説明した。

(『北海タイムス』大正7年8月10日)

これらの記事からもわかるように、植民地住民の「日本人」化は、彼らにとって幸福なことであると認識されていた。また、アイヌにとって道府長官は「酋長」よりも上位にあり、彼らが日本のヒエラルキーの中に組み込まれ、それに従っている様子が見られる。

前述したように、植民地住民が、天皇を頂点とする日本帝国に「無知」なものとして保護されるには、「従順・温順」であることが条件なのだが、対して、保護される前の彼らの「野蛮性」は道民には「本道昔日の気分」(『北海タイムス』大正7年8月12日)を思い出させ、道外者には「北海道と云ふ地方色」(『北海タイムス』大正7年9月16日)を醸し出す格好の材料として利用されていたことが、アイヌのいない会場を視察した在京記者の次の記事から窺える。

会場に入れば寧ろ人に失望を禁ぜざるは、北海道と云ふ地方色の極めて乏しくして殆ど内地府県のそれと変りない出品物が大部分を占て居る事である、最も精細に見物すればそれほどでもないが、遠来の客の多くは熟れも意外の感に打たれる、熊やアイヌの北海道と云ふ感念を以て遣って来たものはアイヌの一人も熊の一疋も内地人の目に入れないのは偶々当事者の用意ある所なるも出品物の殆ど凡てが北海道と云ふ地方色を印象せしめないのは奇心を以て遣って来た内地人を失望せしめるだけ、此道博に対する土産話は持たない事になる。

(『北海タイムス』大正7年9月16日)

「北海道と云ふ地方色の極めて乏しくして殆ど内地府県のそれと変りない出品物が大部分を占て居る事」は、北海道側から見れば、それは

「内地」化の達成であり、このことを内外に示すことが道博の最大の目的だったのであるが、「奇心を以て遣って来た内地人」が道博に期待していたものは、「アイヌの一人」「熊の一疋」に代表される「北海道という地方色」の濃厚な展示だったのである。それは、「内地の人々には愛奴館や毒矢や（中略）旧土人の遺物等が大歓迎されてゐた」(『北海タイムス』大正7年8月15日)という記事にも明白である。

しかし、この当時の儀道府長官は、「移民は今後積極的に入れる必要はない、唯是まで入り来った移民は完全に教育化し人文化し而して遂に土着させ一人も去らしめないことが肝要である」(『北海タイムス』大正7年8月15日)という新たな目標をもっていた。開拓はすでに一段落したということであり、内国植民地からの脱却を視野に入れた発言である。この脱植民地の意識はすでに大正初期から見られた。道民と道外者とのこのような意識のくい違いは道博の展示に限ったことではなく、北海道観そのものに対するくい違いでもあった。

北海道は、政府が早期の「内地」化を望んだ反面、道外者には内国植民地として「内地」化される前の地域色の維持を要求されるという相反する要求を突きつけられていた。しかし、その北海道内においても、道府長官がアイヌの早期「和人」化を推進していたのとは裏腹に、道民は「未開」のままの姿をアイヌに求めていたのではないだろうか。この二つの態度は、道外者が道民を、そして道民がアイヌを、自己の優越性を実感するために、低い位置で留めておきたいという欲望から発している。このことを李孝徳は、「つまりアイヌは、『日本』という境界内に居住する『未開』な他者として表象されることで、『開化』している『日本人』を自己指定する役目を担わされたのである」⁽¹³⁾と説明している。すなわち、児童博のアイヌ館は、決して道外者を集客するためだけに作られたものではないのである。

⁽¹³⁾ 李孝徳『表象空間の近代』新曜社、1996年、247頁

2 アイヌ展示と人類館事件

アイヌ館が、北海タイムス社の記念事業として開催された以上、当然のことながら「和人」のアイヌ館設置に反対する意見や、アイヌ自身の反論は全く記事にされなかった。

ただ、一つ異色だったのは、「拓殖功労と土人表彰」（『北海タイムス』大正7年8月3日）という記事である。これは、「道博開期中本道拓殖に功労ある人々」が「表彰」されることになっているが、「本道土着の土人等にして今日迄相当土人指導乃至土人組合発達に關し尽瘁し併も其成績見るべきものあるもの」がいるにもかかわらず、「未だこれ等類似の名譽に与る事」がないのを「遺憾とし」、疑問を投げかけているものである。特に、「十勝土人中村要吉武田時次郎」は、「從来各地方土人が意志の疎通を欠き土人気風の統一土人風紀改善等に関し遺憾の点ありとし」、アイヌ自ら「全道各地古澤有志の会合協議を」開催するなど、「目的に向って」進んでいた人物であった。

これらは、アイヌを「展示品」としてではなく、「和人」と共に現代を生きるものとして扱い、彼らの行動を模範例として奨励している。しかし、それはあくまでも「和人」から見た模範例であることは明確である。ここでアイヌが向っている「目的」は、「土人気風」や「土人風紀」を「和人」風に「改善」することなのであり、表彰に値するアイヌは立派に「和人化」を達成した者なのである。そして表彰という褒美は、アイヌが自主的に「和人化」することを後押しすることになる。

アイヌを見世物的に展示するアイヌ館の記事を掲載する反面、『北海タイムス』はアイヌ館に関して、次のような注意を付け加えている。「これは決して見世物ではない本会が敢て北海道実情紹介の一端として設けたもので夫妻は家柄だけに代々伝はってゐる家宝数十個及び日常品一切即ち臼や樺の皮で造った手桶の類まで持つて來て現のまゝな生活を示す」（『北海タイムス』大正7年8月1日）ものであるというのである。

この弁明は、おそらく明治36年、大阪で開催された第5回内国勧業博覧会における学術人類館への批判が集中した「人類館事件」を念頭においていると考えられる。

この人類館とは、アイヌをはじめ琉球民族の人々など、先住民や新しく日本の植民地となった土地の人々が見世物まがいに展示されるという企画で、当時人類学の第一人者であった東京帝国大学の坪井正五郎が携わっていた。当時の日本人の多くは、先住民であるアイヌに関して、彼らを劣等であるとすることに何の疑いももっていない。坪井は、「北の方北海道に至れば毛深きをもって有名なるアイヌ」⁽¹⁴⁾という発言をし、彼らに対して日本人は「何をしてあげるべきか」を次のように述べている。

諸種族に対して先進者の地位に在る者は彼等を教え導いて、國に無智の民の無い様にする事を務めるのみならず、彼等の特性を識別利用し、長短相補ひ、國民全体の幸福増進を謀るべきものと考へるので有ります⁽¹⁵⁾。

坪井にしてみれば、良心的なつもりであったのだろうと思われるの、アイヌを「國民」として認めていること、彼らを隔離せず「和人」に合流させようという視点を明確に示していることである。彼には、アイヌを「無智」のまま放置しておくことが、よほど冷淡だと思えたのであろう

このパビリオンは、北海道のアイヌと共に、沖縄県の人びとも展示対象とされたことから大きな問題となった。「本土」の人間からは差別される沖縄の人びとも、アイヌを自らよりも「劣等の者」と見なしていた。そのことは、人類館事件を報じた「とくに台灣の生蕃、北海のアイヌ等と共に本県人を選みたるは、これ、われを

⁽¹⁴⁾ 坪井正五郎「人類学当時の有様 第一編」『東京人類学雑誌』1887年（李孝徳『表象空間の近代』245頁より引用）

⁽¹⁵⁾ 坪井正五郎「帝都版図内の人種」『太陽』、博文館、1906年（李孝徳『表象空間の近代』248頁より引用）

生蕃アイヌ視したるものなり。われにたいする侮辱あにこれより大なるものあらんや」⁽¹⁶⁾といふ『琉球新報』の記事にも見られる。これは、アイヌを「運命的で変ることのない『未開』」とし、沖縄の人々を「実践により『開化』しうる『未開』」⁽¹⁷⁾であると、日本の人類学が定義したことと関連している。つまり、沖縄の人びとは、「未開」から脱出することができないアイヌに比べ、「開化」への道を一步先んじているという解釈である。劣等に置かれた者は、自分よりも更に劣等の者を見出し、自らの存在意義を確認するという繰り返しが、差別を助長させているという構図をそこを見ることがある。

このような経緯から、「人類館」はもともと「学術」という言葉を冠していなかったにもかかわらず、世間の批判を和らげるために、急遽「学術」をつけることで学問領域を装うという手段もとられた。

日本人にとってのアイヌ民族は、たとえば欧米人から見た黒人と同様の存在であるといえる。沖縄県のように過去に独自の王国が成立していた地域や、朝鮮のように古代以来文化的な面で日本が習うところの多かった地域、つまり「古いことは古いが、その時点では」「地位をゆずり渡した、別種の『高度文明』のモデルのなれの果ての姿」⁽¹⁸⁾と、有史以来、常に「異族」として同化の対象にされ続けてきたアイヌへの認識は異なっていた。沖縄文化が「実践により『開化』しうる『未開』」とされたのは、日本の近代化・文明開化の以前の時代、過去のどこかに位置づけられ得るもの、つまり全く異質なものとはされなかつたからである。これに対してアイヌ民族とアイヌ文化は、前述の過程のどこにも存在せず、全く別種であるという見解が、当時有力視されていた。このような認識は、沖縄の

人びとにも共有されていたため、彼等が結果的にアイヌ民存を蔑むことにも繋がったのである。

3 明治記念拓殖博覧会におけるアイヌ展示

もう一つ、児童博主催者としての北海タイムス社が留意していたのは、第5回内国勧業博覧会から約10年後の大正元年11月、東京で開催された明治記念拓殖博覧会の展示である。これは「明治天皇の光ある御治世に於ける我領土膨張を記念すべき」(『北海タイムス』大正7年11月3日)ものとして、「人類学標本、樺太北海道の古文書、殖民地関係図書等」(同上)が展示されていた。この博覧会でも、第5回内国勧業博覧会の学術人類館と同様、坪井正五郎が展示を担当していた。「之を見ると明治天皇の御治世に我々同胞は北海道アイヌを始め琉球人或は沖縄人、台湾人或は台湾土人、台湾蕃人、ギリヤック或はニクブン、オロッコ、朝鮮人と増加した丈け版図も異常なる膨張を見るに至った」(同上)ことがわかると『北海タイムス』の記者は述べている。

そして翌日の紙面では、「人類学標本」として「展示」されている人びとについて解説を加えている(『北海タイムス』大正7年11月4日)。まず、「北海道アイヌ」についてであるが、「内地から移住した人達と区別を為す為め旧土人と云ふ名を用ひられて居る」と同化の前提として、区別を敢えてしている現実が記述されている。同時に「アイヌはアジヤの住民では有るが人種としてはヨーロッパ人に近い所が有る」と人種上の違いが述べられている。そして、人種上の差異と「和人」自らが定義した文明度の差異が、都合の良いように混ぜ合わされ、人種が異なるなら文化も異なっていて自然だという判断をせず、「和人」と区別するのは、人種が異なるから仕様がないという理屈のみに二種類の差異が使われている。

人類学において、「『西洋人』は、『優秀人種』

⁽¹⁶⁾ 『琉球新報』1903年4月11日

⁽¹⁷⁾ 富山一郎「国民の誕生と『日本人種』」『思潮』第845号、1994年

⁽¹⁸⁾ ピル・アッシュクロフト他、木村茂雄訳『ポストコロニアルの文学』青土社、1998年

として想定されて」⁽¹⁹⁾いたが、それならば「人種としてはヨーロッパ人に近い」とされたアイヌは、もっと尊重されていいということにはならないだろうか。伝統的な生活習慣を取り上げて「未開」人種扱いをしているが、上記のような想定であるとすれば、アイヌは「和人」が追いつこうとしていた人種と同列ということになる。しかし、その点の矛盾が指摘される様子はない。

学術人類館でアイヌと同等の存在として扱われた「琉球人或は沖縄人」については、「琉球人も日本の臣民となり今日にては風俗も追々内地の風に変はる様に成了った」ことをこれまでの成果として説明した後で、アイヌとは対照的に「琉球人は元来が日本人と種族的関係の親密な者であることは明である」と言明している。

「外地人」として、「内地人」とも外国人とも異なる特殊な扱いを受けていた「朝鮮人」は、「最早隣人国人で無く日本の内地人と同胞の交りをする事に成った」とその経緯を述べてから、「内地人は人種的に見て純粹とは云ひ得ざる如く一様の性質を有して居らぬ」と、「内地人」の雑種性に触れている。そして、「朝鮮人は少くとも内地人の祖先の一分子と同一と云って差支ないのである」と、日鮮同祖論の学説を紹介している。

このように明治天皇の「威光」はアジア各地に行き渡っており、「内地人」・「日本の臣民」になりつつあるこれらの人々はこの後、「六人種懇親会」を催して、その「喜び」を表現することになる。この六人種懇親会に関しては次のように報道されている。

北海タイムス社の記者の手許に、「別段の設備も無いが粗酒夜肴を呈する興酣なるに及ばば各人種の蕃歌蕃舞を御見聞に達する」（『北海タイムス』大正7年11月14日）という案内状が届いたので、「我が領土内六人種と握手応酬するといふのだから真個未曾有の珍宴會」（同上紙）であると判断した記者は、11月9日午後6時、会場に向かった。主催者である坪井正五郎の挨拶

に続いて、「樺太アイヌの六助と称する六十近き老爺は六人種総代として挨拶」し（『北海タイムス』大正7年11月11日）、「今日は南の人と北の人と集めて懇親会を開き下さって有難い、私たちは毎日面白く暮して居る今晚は大層面白い」（同上紙）と感謝の念を述べた。懇親会は「無礼講」で行われたので（『北海タイムス』大正7年11月15日）、「人種の差別なく上下の区分なく旧人新民一家同胞とあって談笑の中に対酌し珍客一同は殆んど酒に盛り潰され」てしまった（同上）。

招待客たちは「珍客とあれば蕃歌蕃舞を無論強る訳には参らずと雖もオビキ出すべく」「囃立て」たから、「六助君先づ浮れ出して舞台に現はれ皆のアイヌと足拍子面白可笑しくホイホイと踊り出し」、他の「珍客」たちもみな加わった。この様子を見て、「坪井博士はミンナがコウ愉快に樂み遊ぶといふことは二度と出来ないことです今夜は余程嬉しいと見える」（同上）と満足げな感想を語ったという。

明治36年の第5回内国勧業博覧会の学術人類館で生身の人間を展示するという方法が批判されると、展示という露骨な方法の替わりに、植民地住民を「珍客」として「もてなす」という手法に変更されたわけである。

4 博覧会に見える帝国主義

植民地として獲得した土地の住民を展示物として陳列したり、見世物にしたりすることは、日本を含む世界中の博覧会で行なわれていた。明治22年、パリ万博での植民地パビリオン群、明治26年、シカゴ万博での民族学的集落、明治37年、セントルイス万博での人間の展示と数多くある。

吉見俊哉は、「博覧会の時代とは、同時に帝国主義の時代であった」⁽²⁰⁾のだから、安政2年のパリ万博以降、万国博における植民地の展示が活発になっていくのは当然の結果であると述

⁽¹⁹⁾ 注17と同じ

⁽²⁰⁾ 注8、180頁

べ、その理由を次のように説明する。

二〇世紀に入ると、日本においても博覧会は、たんに新しい「文明」を垣間見、技術を習得していく場という以上のものになっていた。日清・日露戦争による植民地の獲得と資本主義の発展を背景に日本の博覧会は、次第に「帝国」としての自国の地位を植民地の「未開」との距離において確認する装置となつていったのである⁽²¹⁾。

北海道開拓の進展による本格的なアイヌ民族との接触に始まり、それに続く台湾・朝鮮といった海外植民地の獲得によってさまざまな民族と接するようになると、一体、「日本人」とはどのような人びとを指すのかという問いか、「内地」の人間に沸き起こってきた。『北海タイムス』大正7年11月4日の記事の「朝鮮人」の項に見られるように、この時期すでに「日本人」の「純血性」は否定されており、「純粹な日本人」というものが存在しない以上、日本人であることを説明するのではなく、日本人でないものを説明することでしか「日本人」を定義できなかつたのである。すなわち、「『日本人』という自己同一性は、『アイヌ』や『琉球人』という客体に設定された微候をとおしてしか確認され」ないし、このように説明が不可能なため「『日本人』自身は直接言及されないまま、沈黙しつづける」ということになる⁽²²⁾。

では、この「微候」とは一体何なのか。それは「『未開』と『開化』の程度」を指すのではないだろうか。人類学では「『未開』は『開化』の方向にしか展開しない」という連続面を支配する法則が前提にされているから、これは言い換えれば、「その発達の程度」⁽²³⁾ということになる。富山一郎は、「主食にする作物」や「衣服」などの「衣食住の程度」=「生計の品位」から、

「日本人」を定義するために引き出された客体の「発達の程度」が測れるのだと説明する⁽²⁴⁾。ここから、「生得的形質」で区別することができない「アイヌ」や「琉球人」と「日本人」の対比項は「発達の程度」であることがわかり、それを基準として「日本人」が定義されていくのである。

この論議の到達点があくまでも「優秀な日本人」=「開化した日本人」を定義することに限られるため、未だ完全に追いついたとはいえない欧米人の差異は強調されることはない。もし、比較するとすれば差異ではなく、上田万年が「英、独、仏等の語は、支那の語よりも日本語に近き者なれども」⁽²⁵⁾と主張したように、この場合は共通項を（実際はどうであれ）抽出することになる。

吉見は、博覧会の主催者=政府が観覧者に望んだことは、「展示されたモノを、素材、製法、効用、時用、価格等の基準で相互に比較し、有益の品と無益の品を比較・選別」する⁽²⁶⁾ことであったと述べている。第5回内国勧業博覧会の場合、「日本人」との優劣を際立たせるために各植民地の住民を展示したのであるが、日本人自身が展示されていない以上、「劣等者」ばかりが陳列されていることになる。日本人は、自分達が展示場に並べられていないということで、見世物にされているとは考えないだろうが、ここで、日本人にとって優位にある欧米人が、植民地住民と共に陳列されていない以上、比較対照となる最優位者は、日本人自らが演じなければならぬから、見方によっては自分達を展示物として植民地住民との中に置くという架空の行為をしていることになる。

また、実際に展示された「劣等者」の中でさらに順序がつけられていたとも考えられる。この場合の順序は、より「内地」化した人びとが優位にあることは言うまでもない。実際に、明

⁽²¹⁾ 注8、214頁

⁽²²⁾ 注17に同じ

⁽²³⁾ 注17に同じ

⁽²⁴⁾ 注17に同じ

⁽²⁵⁾ 上田万年「國語と國家と」1894年、同著「國語のために」富山房、1897年、所収（前掲、李孝徳「表象空間の近代」250頁より引用）

⁽²⁶⁾ 注8、126頁

治26年のシカゴ万博における「民族学的集落」では、民族あるいは国民間に「開明」と「未開」との区別をつけ、白人社会の到達した文明化の最高峰である「ホワイト・シティを頂点とする『進歩』の階梯のなかで占める位置に従ってヒエラルキー的に配置されていた。「入場者たちは、これを『進化』の順に見物していくこと」⁽²⁷⁾が勧奨されたのである。

北海タイムス社は、「児童博の観方に就て——特に小学教員諸氏に望む——興行物と誤解する勿かれ」という題で観覧者に注意を促す記事を載せている。児童博の展示を「興行物と誤解」していると思われる例として、最初に、児童を連れて観覧に訪れた「小学教員」を挙げている。彼らは、「貴重の而も容易に得べからざる出品物を恰も効工場にでも入りたる如く」見物し、「児童等に一言一句の解説をも試み」ないというのである。そんな彼らを、「余に冷々淡々たる教育者と言わねばならぬ」(『北海タイムス』大正7年8月15日)と非難する。そして、その他的一般の観覧者についても、「順序を追ふて各館に入ることを為さず甲館を見れば更に丁館に入る、乙館を見ては丙館を訪ふ、といふやうな有様で甚だ無秩序である」ことを指摘し、「甚だ遺憾」であると不満を述べる。「当局は組織的に苟くも決して観覧者の不快を買ふやうな方法で各館を設けたのではなく、「たとへ専門外の人にでも順序を追ふて行けば飽きることなく興味を持続して観覧し得るやうに設計したのだから矢張建札の指示に従って順序よく観て行く方が便宜だと思ふ」(『北海タイムス』大正7年8月16日)と、観覧方法の改善を求めるのである。

博覧会の展示を指示にしたがって順序よく観覧していくことは、シカゴ万博などでも指摘されていたことだが、ここでも、観覧者は主催者の意図を汲み取るように動かなければいけないとされている。つまり、観客としての側面よりも、主催者=政府の教化策に順応するような観覧者が望ましいものとされたのである。

⁽²⁷⁾ 注8、193頁

このように、アメリカの博覧会を参考にした展示法を採り、その優劣を一目でわかるように工夫しているにもかかわらず、観覧者はただの見世物としてしか出品物を捉えていないと北海タイムス社は不満を述べ、じっくりと比較・対照することを奨励しているのであるが、そうだとすれば、アイヌ館のアイヌ民族は何と比較・対照するのだろうか。

北海タイムス社はアイヌ館を見世物ではないという立場をとっているが、観覧者に「有益の品と無益の品を比較・選別する」ことを望んでいるのならば、その比較対象を設置しないアイヌ館こそ、見世物でしかないのではないか。仮に見世物ではないとすれば、他の人種が同時に展示されていない以上、ここでアイヌの比較の対象となるのは観覧者=「和人」ということになる。当然、観覧者の多くを占める「和人」は、アイヌ館のアイヌに対しては、程度の差こそあれ、白人優越主義ならぬ「和人」優越主義のまなざしで見ていたに違いない。しかし皮肉にもそこでは、自分たちも「観覧される者」として存在していたのである。そして、これはアイヌ民族を教え導く立場の「和人」自らが招いた結果でもあった。

吉見は、シカゴ万博で実行された、この民族展示の配置と順序によって、以下のような効果が得られたと説明している。

- ①「未開人」は、人類学者たちにより「偉大な実物教材」として迎え入れられ、非白人の世界を野蛮で子供じみたものと見なすアメリカ人の見方を「科学的」に正当化していった。
- ②博覧会場の外では階級対立が激化していたこの時代、こうした「階級」に不関与な「人種」に基盤をおくユートピアを、実物の「展示」によって演出した。

これは日本の博覧会にも共通するものである。まず①についてであるが、道博・児童博においても、「実物的」「実況」という言葉を用いて、「現のまゝな生活を示す」(『北海タイムス』大正7年8月1日)ことに主眼が置かれた。このことにより、主催者の意思で作られた見世物

ではないことを強調し、この展示があくまでも「科学的実験的」であることを示そうとしたのである。また、先に触れた第5回内国勧業博覧会の記事でも、「内地に近き異人種を集め、其風俗、器具、生活の模様等を実地に示さんとの趣向にて、北海道のアイヌ五名、(中略)都合三十二名の男女が、各其國の住所に模したる一定の区域内に団欒しつつ、日常の起居動作を見する」⁽²⁸⁾と説明している(傍点は引用者)。

次に②に関しては、海外への移民は少数の技術的な者を除けば、多数は国内での生活に見切りをつけて自主的に国外へ移住する人びとや生活に困窮している人びとを政府自らが送り出すことで成立している。北海道開拓においても、当初の目的は土族の授産事業として出発している。つまり、植民地主義が国外・外地にはけ口を見つけるためのものであることを考えると、植民地住民の展示は、彼らの「劣等性」をより誇張するような方法を採用することによって、国内にいて植民地の実態を知ることができない人びと=観覧者の日常生活の不満をそらすために利用されたともいえる。

札幌での50日にわたる児童博の開催期間中、終始アイヌ館の中で生活させられたアイヌの人びとの扱いは、明治22年のパリ万博や明治26年のシカゴ万博の場合と同じである。だが、ここで注意したいのは、パリやシカゴでは「未開」人たちが何種族も集められて比較されたのに比べ、児童博では前述したように人種としての展示はアイヌ民族のみに限られているという点である。中島公園会場には「朝鮮台灣樺太、関東州、各殖民地の特殊出品を網羅し支那蒙古地方の参考品もあって異国情を喫る」第二参考館というパビリオンが設置されていたが(『北海タイマス』大正7年8月1日)、これらの地域の人間そのものを展示するという方法はとられていなかつた。

しかし大正元年の明治記念拓殖博覧会では、

不完全ではあるが生身の人間を展示するという乱暴な手法が見送られたにもかかわらず、6年後の道博では、数が減ったにしても人間をパビリオン内で生活させるという展示方法が再現されてしまったのである。

道博の開会期間中、アイヌ民族を博覧会のパビリオン内に生活させるという方法について主催者は、彼らを「動く教材」として扱っていることを隠そうとしない。それは、博覧会の当初の目的が、発見された標本を分類し展示するということにあった流れを引いているためであろう。発見されたものが有機物であろうと無機物であろうと、その区別はなされることはない。生きている植民地住民を展示する方が、観覧者との差異は過去のものではなく、現在でもこれだけ差があるのだということを強調することができる。加えて、植民地住民の「未開」性は、観覧者がすでに通り過ぎた段階にまだ留まっていることであると解釈し、自分たちが「成長した大人」として彼ら「子ども」を育て導いてやらなければならないという口実を、植民地主義的行為に与える役目も果たしているのである。このように考えていく時、博覧会というものは帝国主義・植民地主義の体現の一つであるということが改めて認識される。

5 アイヌと「和人」の「雑婚」

1934年に刊行された北海道庁『北海道旧土人保護沿革史』には、「土人果して亡びるか?」という一節がある⁽²⁹⁾。これは第2次世界大戦以前に行なわれたアイヌ民族の人口調査に関する記述であるが、正確なアイヌの人口統計を算出するのがその時点ですでに不可能である理由として、「土人とは単に俗称に過ぎず」「現行の法制上に於ては、何等土人・和人の区別はない」と、「両者の雑婚に依って生れた所謂混血児」が多くなってきていることを挙げている。それに

⁽²⁸⁾『風俗画報』第269号、1903年(吉見俊哉『博覧会の政治学』213頁より引用)

⁽²⁹⁾ 北海道庁編『北海道旧土人保護沿革史』北海道庁、1934年(第一書房より1981年に復刻)324頁以下

加えて、「人間の容貌は、生活関係や、環境の影響に依って著しく変化を来すもの」であるから、アイヌの中でも「一般和人の中に文化的生活をしてゐる者は、段々和人化し、一見して殆ど両者の区別が付かなくなる」と述べる。

道府はもとから「純粹なままのアイヌ」よりも「混血児」のようなより「和人化」した者を好ましいとしていて、アイヌ民族の人口が統計上一向に増えないことを、「本道の土人は、絶対の意味に於ける滅亡しつゝあるものにあらずして、大和民族中に融合しつゝ、発展を遂げつゝあるものと言ふを得る」と「雑婚」による成果と判断しているのである。

アイヌと「和人」の雑婚による「混血児」の増加という事実が、いつの時点を指してそう判断されているのかは不明であるが、「北海道旧土人保護法」成立直前の明治32年2月、アイヌの「混血児」はアイヌと「和人」のどちらに分類して戸籍に入れるのかといった質問が法案の審議に関わった貴族院議員によってすでになされていることから、道博の開かれた大正7年には、より一層「混血児」が増加していただろうと判断して差し付かえないものと思われる。また、昭和9年を基準として「最近の調査に依れば、和人にして土人の家に入嫁、入婿せるものは六百二十八人、土人にして和人の家に入嫁入婿せる者は八百七十二人にして、此の傾向は歳と共に増加しつゝある。斯く雑婚に依って生れ出る子女は、概ね和人の方に多く似てゐる」⁽³⁰⁾という記述も見られる。

吉見は、「博物的空間において、特権的な作用を果たすようになるのが視覚である」と定義し、視覚の重要性に言及する。その上で、発見したもの同一性と相違性の点から分類し配置することを「博物的視線」と呼んでいる⁽³¹⁾。これに従って、アイヌを「和人」が「発見したもの」とすると、その容貌(=視覚で捉えられるもの)は、アイヌと「和人」を分類する「有効な手段」

となる。しかし、容貌にはかなりの個人差があるし、上述のように、「雑婚」や生活環境によって「著しく変化を来すもの」であるから、そのような不安定な要素で人種間の優劣が測られていたということになる。逆に言えば、不安定要素だからこそ、それまでの「劣位者」が「優位者」になり得る可能性もあったといえる。

したがって、アイヌと「和人」の「雑婚」が禁じられず、むしろ奨励されていたこの時期の日本社会は、人種観の優劣は必ずしも固定されず、変更可能であることを示す社会でもあったのではないだろうか。それが、いかに建前であつたとしても、白人と黄色人種の結婚が禁止されていたアメリカ・カリフォルニア州ではなし得なかつたことでもある。

もちろん、実際にはアイヌと「和人」は明確に区別され、アイヌは一方的に発展途上の人種として「和人」よりも下位に置かれていた。その「劣性」が人類学という学問の衣をまとめて「科学的」に比較検討され、大衆の前に配置してみせたものが博覧会なのである。

しかし、「和人」との「雑婚」が本当にアイヌにとって望ましい方法であったかどうかは別として、「和人」社会では「和人」がアイヌと結婚をして混血児を産むということがアイヌにとって「真に理想的な結構な事」⁽³²⁾とされていたことも事実であり、アイヌには、カリフォルニアの日系人のように何世代たっても超えられない可視的な壁というものはなかったということもできるのではないだろうか。

進藤道太郎「南米秘露風俗」⁽³³⁾では、ペルーには日本には存在しないような美人がいて、「日本人に対しては悪感情は更にもって居ないので、よろこんで結婚すること、「現に日本移民で少し長く向ふに居るものは、だいぶこれ等の美人

⁽³⁰⁾ 『ジョン・バチェラー自叙伝 我が記憶をたどりて』（小川正人、前掲書より引用）

⁽³¹⁾ 進藤道太郎「南米秘露風俗」「殖民世界」成功雑誌社、1908年5月（金子明雄他『ディスクールの帝国：明治30年代の文化研究』新曜社、2000年、より引用）

⁽³⁰⁾ 注29に同じ

⁽³¹⁾ 注8、11頁

と結婚して居る」ということが書かれている。明治の一時期には日本人種改良論も論じられたくらいの国民性であるので、日本人がアングロサクソン系より混血に抵抗がないことは理解できるが、「秘露人はラテン民族中の最劣等人種西班牙人と、性來懶惰な秘露土との雑婚」⁽³⁴⁾といった表現にもある通り、多くの日本人は、ペル一人を日本人よりも下等な人種とみなしていた。日本人より優等だと定義された白人との混血で日本人を改良しようという目的はすぐに飲み込めるが、はっきりと劣等視しているペル一人との雑婚をも避ける様子はない。

これはアイヌとの雑婚・混血の状況にもいえることである。明治政府は「和人」との混血を奨励し、より「和人」に近いアイヌを望ましい者としていた。それが、アイヌにとっても幸福であり、「平和的同化」の最良策とされたからである。つまり、日本人自らを基準にして、それよりも優等とする者との混血により自らを改良し、日本人より劣等とする者との混血により相手を改良しようとしたのである。つまり、「劣等者」を「優等者」に改造する一つの方法が雑婚だったのだ。

小熊英二は「人種の先天的な優劣を認めないことは日本の人類学者にほぼ共通した傾向で」⁽³⁵⁾あることを指摘し、それは「当時の『日本人』が周辺地域を支配していながらも欧米からは差別の脅威にさらされているという両義性を抱えて」いたからだと説明している。

つまり、日本人は自らへ向けられる蔑視感情のゆえに、人種の「優劣は、遺伝的に決定されるものではなく、『修養』という実践においてのりこえ可能なものとして設定」⁽³⁶⁾していたのである。そうでなければ、白色人種から劣性とされたことを覆すことはできないし、実際に日本人は「雑婚」という方法でこの問題に対処しよう

うとしていたのである。

おわりに

ここまで、『北海タイムス』が報道する大正7年の北海道博覧会・児童博覧会についての記事を中心に考察してきた。この結果、次の三つの論点を抽出することができる。

第一に、博覧会は植民地住民や先住民の「未開」性を必要以上に強調し、大日本帝国と日本臣民の優位性を可視化していくプロパガンダ装置としての一面をもっているということである。これは、海外での欧米の博覧会を模したものもある。

第二に、大日本帝国にふさわしい日本臣民を創り出すためには、広範囲に同一の情報を流すことができるマスメディアを利用して、日本人の優秀性を自覚させ、それを伸ばすための教育論を大衆に浸透させが必要であり、そのためには母親と将来を担う子供へ働きかけることが有効だと考えられていたということである。その近代日本を担う子供に的を絞った児童博に、わざわざアイヌ館を設置することは、子供に、アイヌ民族が「発展途上の人びと」だという意識を植え付ける結果となった。

これを最大限に利用したのが、明治後半から大正にかけて国内で盛んに行なわれた子供博・家庭博の類である。

第三に、そうして作り上げられた日本臣民としての意識を搖るぎないものとするために、彼らの優越感をくすぐり、自信を深める役目を負わされたのが、「展示」された植民地住民であったということである。

ポール・ギルロイは、「近代の進歩と考えられているものの多くが、実際のところ、人種的に支配的なグループの権力に依存した非実質的で擬似の進歩」⁽³⁷⁾であると述べている。とするならば、「支配的なグループ」が区別した開明と「未開」も、その後の権力移動により容易に変化す

⁽³⁴⁾ 朝日胤一「秘露日本人会活動談」「殖民世界」成功雜誌社、1908年8月(前掲『ディスクールの帝国』より引用)

⁽³⁵⁾ 注1に同じ

⁽³⁶⁾ 注17に同じ

⁽³⁷⁾ 注12に同じ

るものである。開明・進歩という状態が白人側に先天的に与えられたものではないにもかかわらず、帝国主義・植民地主義の時代に支配者の地位にあった白人にとって、黃色人種である日本人が明治以降着実に国力を上げていることは、この開明・進歩という権力が白人以外にも分散されることを予感させ、この予想外の事態に恐れを抱くようになるのである。

ビル・アッシュクロフト他『ポストコロニアルの文学』では、白人が他の人種の文化をどのように把握しているのかが次のように説明されている。

アフリカの美術品が、一見したところ「類似の」文化、つまりニューギニアや南海諸島、北アメリカのインディアンやイヌイト、ニュージーランドのマオリ、それにオーストラリアのアボリジニなどの美術とともに、「時間の中で保存された」文化、つまり、人類共通の原始的また土着民的な文化衝動をあらわす標本とみなされるにいたったのである。これらの芸術は、したがって、文明化された芸術の発展過程における、ひとつの「段階」を反映するものとされた。しかしその一方、この民族誌学的な観点には、その当初から、もつと根本的で恐怖心をはらんだ複雑なヴィジョンがつきまとっていた。すなわち、この「原始的」な芸術を、ヨーロッパの文明化された精神の「裏面」、人間の「暗黒」面をあらわした芸術と捉える視点である⁽³⁸⁾。

アイヌ文化も「時間の中で保存された」文化として扱われていたことは、戦前、現アイヌ民族と石器時代人とを同一視する見解が大勢を占めていた事実からもわかる⁽³⁹⁾。アイヌが日本人の直接の先祖であるか否かは意見の分かれるところであったが、彼等が石器時代から現在まで全く変化のないものとして扱われていたことに

違ひはない。アイヌ固有の文化の保存を唱える者は、彼らに自分たちのルーツを垣間見、懐古趣味に似た感情があったともいえるだろう。反面、アイヌを「和人」文化に適応させようとする者は、進化の過程に乗り遅れた「憐れむべき民」として、彼らに進化への道筋を示してやろうとした。このどちらも、進んだ「和人」文化の「裏面」としての役割をアイヌ文化に担わせたのである。アイヌ文化は「発展過程における、ひとつの『段階』を反映するもの」であるが、「『時間の中で保存された』文化」と規定された以上、その「段階」を上昇していくことは考えられていなかった。

白人や「和人」が、アイヌなどの先住民や植民地住民と自分たちとの差異をことさら強調するのは、自らの内に彼らと共に通する「『暗黒』面」が存在することに、過敏に反応した結果だとも言えるだろう。自分たちと相手に何の共通点も見出さなければ、逆に相手に対して鷙揚に接することができるものだが、相手を必要以上に拒絶する心の奥には、できれば見たくない己の「未開」で「劣って」いる面が共有されていることに気づいたからである。それは生活圏を共にする先住民や植民地住民に厳しい態度をとる人間が、生活圏を共にしないそれらの人びとには寛大であるのと同じ理屈であろう。つまり、後者は博覧会に「展示」されている人びとと同じで、自らのテリトリーを侵す心配がない、言い換えば利害関係がない「標本」だからなのである。

『北海タイムス』は、北海道を代表する言論機関として、道外紙のようにアイヌを「滅び行く民族」としてのみ、過保護的に扱うというような論調をとることはできなかった。なぜなら、アイヌ民族の以前に道民を「内地」人の水準に引き上げさせるように働きかけなければならなかつたからである。『北海タイムス』が道外紙に比べて、地元に抱えた人種問題にもかかわらず、アイヌ問題に対して距離をとって対応しているのは、道民の自信のなさの裏返しといえるのではないだろうか。

⁽³⁸⁾ 注 18 と同じ

⁽³⁹⁾ 小熊英二『单一民族神話の起源』新曜社、1995 年

札幌大学経済学部附属地域経済研究所 地域と経済 第7号

(本論文は、筆者が2003年3月、北海道大学大
学院文学研究科に提出した修士論文に、加筆訂
正を加えたものである)